

佐久間象山 : 雑録

著者	杉山, 富槌
雑誌名	龍南會雜誌
巻	17
ページ	19-23
発行年	1893-05-27
その他の言語のタイトル	佐久間象山 : 雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/4074

ば各國年々の統計表面に於て勝敗の數昭々として明白なり然れども國民の元氣なるものは一個無形物なり其大小多寡固より計式的算數を以て遽に判斷すべきにあらざる而して此元氣の多少に依りては小國必しも大國を畏るゝに足らず大國必しも小國を侮ると能はざるなり所謂杆を爲て秦楚の堅甲利兵を打たまむべきなり見よ彼北米は共和國を彼建國 因を考一考せよ今古の歴史は不幸にして白面生の論を証して餘あらずと謂ふ可し

古人曰く三軍帥可奪匹夫志不可奪と況んや我同胞四千万の人士が元氣炎々烈火の如く同心協力義勇國を盡し死して悔ゆるなきに至らば我大日本帝國は宛も東海の表に屹出する富岳の如くならん元氣一さび振はゞ區々たる臨機の策略の如き刀を迎へて解けん耳嗚呼主我的氣象なる哉主我的氣象なる哉個人獨立の理亦た是れ國家獨立の大義なる哉

雜 錄

佐久間象山

杉山富樫

佐久間修理は信州松代に生れ象山と號す、當時國歩艱難を極め、人心動搖えて靜止せず、幕府之を制御鎮壓するに困む、象山慨然とまて爲す所あらんと欲す、擯でられて江戸に遊學し、刻苦粹勵、和漢の群籍を涉獵し、泰西の軍學を討究せ、大に造詣する所あり、爾後二十餘年の間、或は入て藩主の顧問となり、或は出で、天下を跋渉し、以て海防の籌策を建て、天下の形勢を察し、國民の士氣を振ひ、終始一の如く開港を主張し、艱難交々迫りて志氣益々堅く、百折千挫而も毅然たり、然りと雖も英傑偉人多くは當世に容れられず、悲ひ哉象山も亦た天寵を荷ふて其志を伸ぶる能はず、不世出の伎倆を抱き

つゝ毒及よ弊れたと、

藩主眞田幸貫英明の資あり、象山を擢で、卓才雄略を縦にするを得せしむ、嘗て象山を論評して曰く、修理疵瑕多しと雖も、亦た一個の豪傑也と、然り實に渠は近代に於ける偉大なる人物たるなり、其思想の高遠にして、氣象卓拔なる、俗輩を凌ぎて九天に翔り、凡庸を越て千里に逍ふ、何ぞ其盛なるや、日常の事業を處理するや定規を外れず、人情に恃らず、大道を樂みて妄想に陥らず、博く智識を求めて内治對外の策を爲之、公明正大深く國家を憂へたり、吾人固より渠の人物を圓満なりとし、渠が完全に實行を擧げ得たりとは信せず、然りと雖も渠の胸底には一種の烈火熱焰ありて、其理想する所の者を追求し、之を享樂せんことを務め、又幾分か其希望を達せまや疑ふ可らず、渠君子の快樂を説きて曰く、

君子有五樂、而富貴不與焉、一門知禮義、骨肉無罅隙、一樂也、取予不苟、廉潔自養、內不愧於妻孥、外不詐於衆民、二樂也、講明聖學、心識大道、隨時安義、處險如夷、三樂也、生乎西人啓理窟之後、而知古聖賢所未曾識之理、四樂也、東洋道德西洋藝術、精粗不遺表裏兼該因、以澤民物報國恩、五樂也、

嗚呼渠の志望の如何に遠大なるぞや、自家と國家に關する理想の如何に高尚なるぞや、渠は此理想の爲めに、熱心銳意、以て日夜碎勵盡力せり、吾人は今日に於て之を想見し、其人物の雄偉なるを推察せざるを得ず、象山初めて江戸に遊ばむとするや、其母之に訓へて曰く、汝學問せんと欲せば宜しく篤實にまて道に志し勤苦して徳に進むべし、若し汝の心術言行風俗と等夷なれば、甘旨養を極め、侍事勞を盡すと雖も我樂まじ、學問の要此心を體するなくんば効あるなしと、象山深く之に感激し、終生之を妄却せざりしと云ふ、道徳上に於ける造詣の彼の如き、亦た當然なると謂つ可き、今や世人相共

に輕薄浮躁に奔り、廉潔は美風地を掃て去り、質朴の良俗殆んど之を見る能はず、道德の修養に至て之を顧る者至て少なく、家庭之風波穩かならず、朋友の交際浮薄に始終す、斯の如きもの滔々皆な然り、豈に慨して歎せざるを得んや、嗚呼吾人青年は實に正義公道の大略に依り、道德を修養し、藝術を熟練せ、文學を學習し、淳朴廉潔、以て國家有用の棟梁となるを期し、之を勉勵せざる可らず、象山は自ら天の寵を荷へることを信せり、進で爲さざる可らざるの義務あることを知れり、渠社會に於ける先進者の責任を説て曰く、

人所不及知而我獨知之、人所不能而我獨能之、是亦天之寵也、荷天之寵如此、而惟爲一身不爲天下計、則其負天也、豈不亦太乎、

而て渠は其學識も其藝術も自家の責任の爲めに致すべきを信じ、熱心を以て千難万苦を凌げり、請ふ見よ、現今の社會の狀態果して如何、經世家を以て任ずる者も、其地位情實の奴隸となり大略遠謀を著へ、之を實行せんとする者なし、實業家は徒に自家の利益を計り、一舉手一投足の勞悉く皆な此慾望を遂げんとするに外ならず、國產貿易の業萎靡して振はず、工業殖産の事歲月を重ねて今日に至るも尙は實効を見ず、教育家にして眞に國民を教育し得る者少し、吾人は勿論今日の社會を擧て此の如しとは言はざるも、少くとも此の如き弊あるは事實なり、我邦國事多難なる時に當りて、情勢果て此の如しとせば、誰か慷慨の熱涙を灑がざる者ぞ、吾人は天の寵を荷ふの人にして、惟だ一身の爲めにし天下の計の爲めにせざるを痛惜せずんばならず、象山は我邦の最も多難なる時に生れ、非凡なる識見と才能とを以て大略遠謀を實行し、非常なる憂國の精神を以て國家百年の大計を立てたり、我邦の今日ある象山與て大功なしと謂ふ可けんや、現時の日本は象山の如き人物を要求すること甚だ切

なり、嗚呼何ぞ象山の出づるの遅きや、

改革は青年の紅涙と熱誠とに非ずんば之を成就すること能はず、明治維新の改革も改革の健兒によりて企圖せられ實行せられたり、北米獨立の偉業も亦た有爲の青年の手腕に依りて成就せられたり、舊教腐敗の空氣は獨逸深林中の青年の事業によりて排除せられたり、實に青年は進取の氣象胸腔に滿ち、常に確乎たる希望の光芒を有てり、艱難辛苦と彼等の寧ろ喜んで衝かんことを欲する所なり、然り而て社會は常に此改革の健兒を要す、何となきば社會は動もすれば停滞し沈靜し腐敗せんとする傾向を有すまばなり、而て現今の我邦は此改革の健兒を待つや久し、何ぞ健兒起て改革の事業を執らざる、嗚呼何ぞ健兒起て改革の事業を取らざる、改革とは惟に破壊を意味せずして建設を意味す、今日の日本は許多れ建設的の事業を有せり、此事業改革の健兒によらずんば誰をか待たん、憂慮する勿れ社會汝を容れず社會汝を苦むと、象山を見ずや、其大略遠謀は當時に容れられず、其伎倆識見は世人に斥けられしなり、實に渠は深夜萬籟靜かなる處、孤立の感慨に暗涙を灑ぎしなり、其咏歌を一吟せば其苦心察し得て餘あるべし、

こゝろみにいざや呼はん山びこのあたへだにせば聲は惜し、

思ふこと誰にか告げんますかゝみ影ならで聞く人もなき世は、

渠は高尚なる理想を有せるが故に、身は逆境に立つに至るも敢て辭せざりしなり、渠は天寵を荷へる者は苟も一身の計をなさず、天下の爲めに計るべき任務あることを確信し、此任務を全うして天に負かさらんことを期せり、何ぞ其剛毅にして熱誠なるや、其事業の献身的犠牲的なりと豈に怪むに足らんや、宜なる哉、『聲惜まざりし』其叫聲は幾年の後に其反響を聞き、後代れ人は渠に同情を表し、當

時を忍びて熱涙を惜まざること、象山嘗て其覺悟を述て曰く、啓此論を持すること此に二十余年、天下に表白するを得ば死すども斯言を易ふる能はず、且つ夫れ古よ、英傑の士創業の秋に際し、獨得の意見を懐く者は、未だ曾て身を殺し以て其志を成さずんばあらざるなりと、然り改革の健兒たる者は徒ま姑息の計謀に據ることなく進取せざる可らず、成功の時期の如きは百年の後を待つも可なり、千年の後を待つも亦た可なり、象山君恩の詩を誦て曰へる一節に、

君恩如天地、國恩如江海、外患今非一、奮身思有濟、勉勵十余年、何問明與晦、在卑欲爲池、在高欲爲壘、(中略)忠義許君國、百折何曾悔、用得在得人、全勝在知彼、是非不可磨、公論期千歲、

此詩を一吟來まきは、吾人象山の熱誠忠義を察し、其辛苦經營を想ひ、其性行品性を知るに足る者あり、嗚呼象山の本領とせし所を以て其本領とまざる者何くにかある、今日の青年を措て將た誰にう之を望まん

慶應義塾概観

在慶應義塾 客員 山口力磨

東京芝増上寺門前南に去れば、則ち三田薩摩原なり、西南近く一帯の高臺あり、林樹隱約の際、恰も赤煉瓦の數棟を認む、嗚呼是れ豈に、明治新文明の搖籃、慶應義塾の講堂に非ずや、抑も慶應義塾なるものは、其のかみ安政五年の冬、福澤諭吉なる處士ありて、鐵砲洲奥平邸内に於て、始めて一小家塾を開きしに起因し、爾來三十五年を経て、今日に至りし者にして、當時素より一錢の資本、一人の味方だに、あらざりしと云ひしに、今や義塾構内の面積、一万五千坪に上り、建物の敷地亦三千坪を下らず、及門の子弟、已に八千余人、高等の官吏となり、學校長となり、銀行長となり、會社の重役となり、新聞